

## 「死者生者」再説

― 先行文学との類縁性をめぐって ―

瓜 生 清

(平成3年9月10日受理)

### (一)

かつて拙稿において「死者生者」(『中央公論』大5・9)の作品研究を試みたことがある(本学紀要・文科編第38号平元・2)。しかし、その時点では「死者生者」と先行文学との影響関係・類縁性の問題は、考察の対象から除外していた。具体的には、村上美佐子氏が「正宗白鳥『死者生者』論―死と殺気の系譜」(森山重雄編『日本文学始源から現代へ』笠間書院 昭53・9・30)において、作中人物の清吉とおてつ・邦太の造型をめぐって、トルストイ「イワン・イリイチの死」、チェーホフ「ねむい」、「玉突屋」(『太陽』明41・1)との比較研究を展開していた点である。拙論を書いた際には、村上論文の内容に多く付けくわえる必要を認めなかった。今回、その見解に若干の疑義・異見を持つにいたったこと、とりわけ「死者生者」に影を投げかけた先行文学として「ねむい」「玉突屋」の場合とはともかく、全く別のシュニッツラー原作森鷗外訳『みれん』を想定し、相互の比較研究から解明しなければならぬ問題があることに気づくようになった。以上が、再度「死者生者」を

論題に据えることになった理由である。

二つ目の理由は、「死者生者」に関して執筆の舞台裏をこまかく説いた「事実と想像」(『中央文学』大6・4)の内容を、上記の比較研究と関連づけて再検討することが必要であると考えたことである。白鳥の説明にしたがうと、「死者生者」は「私の作中では珍しくモデルに接近した作」であり、「当時の見聞を材料として、写實的に描叙した」と回想する戦後の「解説」(『死者生者』(『日本文学選16』光文社 昭22・9・15)においても終始一貫している。しかし、モデルとの密着を強調する文面は、大綱においてはともかく、その忠実な再現であることを必ずしも保証するものではあるまい。モデルと小説の対応関係においてすぐに思いうかぶ事例は、「死者生者」の前年に発表された「入江のひとり」(『太陽』大4・4)である。「入江のひとり」に関しては、白鳥の小説として異例な「身辺の事相を無造作に書き流した」(『文壇的自叙伝』(『中央公論』昭13・2・7)創作であると回想した周知の解説がある。自註を信じるかぎり、生家とそこに生きる人間の姿を克明に描いた実録的小説であると見做される。しかし、当の小説が身辺の素材をもと

に衰微する家郷と血族の運命を巧緻に再構成した純然たる表現世界であるという自明の事柄を持ちだすまでもなく、「死者生者」とモデルとの準拠関係の場合についても、無神経ではいられないのである。清吉・おきく夫婦、従弟信造に關し、「死者に子供があるので、子供の後の亭主との関係が面白さうなのだが、私には書けさうにないから除きました。」という一節は、上記の作中人物とモデルとが基本的には対応関係にあることを示唆しているようであるが、その間子供を削除するという大胆な改変も行われている。「床屋の事と八百屋の事とは関係のない別々の事件なのを私が工夫して隣り合せに結びつけた」という文面は、異なる素材もモチーフの展開上有効な設定と見定められた時、あえて作爲的に結合することを憚らない小説作法を物語っている。「死者生者」第五章の病苦をまぎらすため清吉が念仏を唱える条は、「私が胃腸病院へ通つてゐた時分に、ある胃癌患者について見聞したのを持つて来た」と述べ、身近な体験から得たディテールを借用している。自註で判明しているだけでなく、削除・結合・借用を存分に發揮した「死者生者」の創作は、モデルの外枠に一定程度従いながらも、「材料について洞察」を十分に働かせ、作中人物の内面を把握し直す極めて創造的な営為であったはずである。このように考えてくると、前記の先行文学との関係とモデルに対する準拠程度の問題は全く別の事柄ではなく、モデルを内面的に「洞察」する作業において、その把握を背後から有力に支える先行文学に直接間接に示唆された結果、濃厚な類縁性が生じていると考えるべきではないかと思う。

昭和九年四月十日、父浦二の無惨な臨終を見とった白鳥は、父の死を契機にあらためて死生観を問ひなおすエッセー「『死』を描いた文学」〔読売新聞〕昭和9・6・28〕を発表している。村上氏は前記の論文に

において、「イワン・イリイチの死」の作品評になっている「死に行く人間の心持の経路、周囲の生存者の死者に対する気持、その気持が死に臨んだ人間の心に反映する有様が、手に取る如く描かれてゐる。」という上記エッセーの一節を引き、その理解の仕方は「このまま『死者生者』評にあてはめることができる。」と述べている。もちろん村上氏は、「イワン・イリイチの死」をはじめて読んだ時期が白鳥によって明示されず、昭和九年を遡ること「何十年前か前に英訳で読んだ」と回想している曖昧な事情をも考慮し、「死者生者」の作意を直接そのまま「イワン・イリイチの死」に求めるわけにはいかなないと慎重な言いまわしをしながらも、死生観をめぐる発問と得られた認識を担い、結局救われぬ死に終る清吉の姿は、「『白鳥のイワン・イリイチ』以外の何物でもない。」と断じている。両作は、死の恐怖とそこからの脱却という共通した内容を持ちながら、作中人物がたどる運命の際立った対照について、信仰を確立したトルストイと依然懷疑の人であり続ける白鳥を対比する氏の論述はあざやかだが、両作品の間に影響関係を想定した場合、やはり小説の内容・方法等において多くの相違点が目につく。「死者生者」はその発端から、「思ひ遣りのない」と一方的に妻の無情を責める清吉と「病人は無理ばかり云つて私をいぢめる」と思いつめるおきくとのすれちがった関係を描いてゆく。死んでゆく人間の孤独と、旺盛に自己を主張してやまない生者の欲望との折りあうことのない平行関係・二項対立の世界を、特定の人物に焦点を集中させることなく、客観的視点で描いた小説である。一方、「イワン・イリイチの死」は題名の如く、現世的価値に激しく執着し、それゆえ過剰に苦しめられる死の恐怖から、前半生への悔悟によって救済される過程を、イリイチの内面を求心的に掘り下げることによって追跡する。イリイチの周辺に配置された家人・同僚達は、二次的存在

であることから、イリイチと対等の関係にある他者とは言いがたい。死者と生者とが互いに相剋し合う関係を主軸にする「死者生者」とは異なる面が多い。その他、「死者生者」執筆時、「イワン・イリイチの死」が着想の契機になっていたとは考えがたい理由に、管見によれば本作について十一例にのぼる白鳥の言及が、父浦二の死去以後に見いだされる事実があげられよう。初読の時の感動が白鳥の中で意識され続けていたならば、大正五年までの間に、なにがしかの発言があつても不思議ではない。さらに、白鳥において死の恐怖・その超克という認識と問いが恒常的であつたことは、「死者生者」の執筆時においても、「イワン・イリイチの死」を意識したか否かに関係なく、なんらかわることはなかったと考えられる。死んでゆく人間の生への執着、後に残される妻への未練と、徐々に情合を冷却させ冷淡な傍観者に変貌してゆく生者の心理を交錯させ、彼岸と此岸とに對峙し合うような関係の形成を追究した「死者生者」は、その影響関係について、「イワン・イリイチの死」ではなくむしろ前記森鷗外訳『みれん』から探られるべきであろう。

## (11)

A. schnitzler: sterben, 1906. が鷗外の達意の訳文で翻訳発表されたのは、明治四十五年「東京日々新聞」(明45・1・11・3・10)紙上においてである。同年七月五日、初山書店から単行上梓されている『みれん』に関する書誌的な事項については、小堀桂一郎『森鷗外—文業解題(翻訳篇)』(岩波書店 昭57・3・30)を参照。以下『みれん』の引用は、岩波書店版『鷗外全集』第九卷(昭47・7・22)所収本文による。「新聞に連載さる、や、満都の読者を狂熱せしめ」(『みれん』広告文)

た鷗外の翻訳は、出版後も依然反響を及ぼし続けている。「批評と紹介」(森鷗外訳シュニツラー『みれん』)、「時事新報」明45・7・15)の絶讃に近い紹介にその一端がうかがえ、「愛読される書物」(「読売新聞」明45・8・11)にも好評裡に多くの読者を得ている『みれん』について報じられている。自然主義文学を後景に押しやり類唐思潮が一世を風靡する明治末年から大正初頭にかけて、時代の好尚に適った官能的、頹廢的な作風と古都ウィーンの都会情緒等を特色とするシュニツラー文学の翻訳が、鷗外の精力的な訳業を筆頭に数多く行われ、シュニツラーとその作品の概要を紹介した山岸光宣の論文「アルトゥール・シュニツラー論」(「早稲田文学」明45・6)も発表されるなど、あたかもブームのごとき現象が形成されていた。勿論、白鳥も唯美主義が浸潤する時代動向に無関心であつたとは考えられないが、白鳥にも及んだ『みれん』の波紋は、白鳥固有の死生観の問題をめぐつてであつた。シュニツラーとの関係は、一見すると白鳥文学における比較文学的検討課題として一分野をなすに足らないかのようである。白鳥がシュニツラーに言及した例は、管見によれば『みれん』以外にはなく、しかも三つの資料を数えるだけである。しかし、白鳥の内部に波紋を投げかけた『みれん』は、「死者生者」を考える場合、両作品の内容・表現面での相関が、直接の受容の結果生じた影響として想定しなければ説明のつかない強い結びつきを示しており、両者の類似と相違の意味について探究することが必要なのである。

白鳥が『みれん』に関心を示した最初の資料は、アンケート「昨年の芸術界に於いて(一)」「(五)」(「読売新聞」大2・1・11・3・5、7)である。読売新聞が四十一名の文壇人から「一、文学—最も興味を惹いた創作又は評論」のほか、演劇等のジャンルについての回答を集成

したものである。白鳥は元日掲載の回答において「(一) 鷗外訳の『みれん』」と答えている。アンケート実施に際して、新聞社側は「右は成るべく無名の人又は新進の人を奨励する意味にて作者(演者)と題目(狂言)とお記し被下度候」と要望していた。しかも(ただし、白鳥の好尚が左右する側面も考慮しなければならないが)、漱石・武者小路・志賀・小川未明等の作品が発表された前年度の創作壇は、新人の目ざましい擡頭こそなかったが、特に不振であつたわけではない。上記の諸事情を考えると、あえて大家鷗外の、しかも翻訳を推讃する回答の姿勢は、白鳥が受けた感銘の深さを髣髴とさせる。因みに、上記アンケート中、『みれん』を推した回答者はほかに小川未明一人であつた。

ところで、『みれん』が与えた感動を具体的に示唆する重要資料として小説『梅鉢草』(『新小説』大5・10)があげられる。『梅鉢草』は、大正五年七月曾遊の地伊香保に旅した時の体験を描いたもので、作中明治四十五年七月の伊香保行及び榛名登山を回想した条に関し、次のような興味深い一節が見いだされる。

私自身は四五年前にN君に伴つて、湖水から神社まで遺憾なく見たことがあつたので、二週間の滞在中をりく空想に浮べるばかりで、も一度山登りをする気にはなれなかつたのだが、いよくお名残りとして廊下に立つて眺めを貪つてゐると、榛名への再遊の楽しみがふと念頭に浮んだ。(中略)この前N君と来た時には、二人とも無口なので、殆んど休みなしで、一気に神社まで行つたのだが、でも、途中で鷗外さんの翻訳の『みれん』といふ小説について話し合つたことは今でも覚えてゐた。死生の争ひと人間の妄執について、互ひに話を進めたことがほんやり記憶に残つてゐる。N君は私が何を云つても反対しないで、『うんく。』と応へてゐた。

「梅鉢草」が「死者生者」の翌月に発表された事実は、『みれん』が白鳥の内部へ浸透し続けていることを証明している。この問題に入る前に『梅鉢草』の私小説性について若干言及しておく。作中には、島村抱月・松井須磨子等「芸術座」の一行と榛名湖畔で偶然邂逅する記述が見え、『梅鉢草』は身辺雑記風の私小説であることを印象づけている。しかし、ことは『みれん』の受容にかかわる問題であるから、一応「梅鉢草」の引用部の事実関係について確認しておく必要がある。「四五年前」の榛名行は、明治四十五年七月二十七日付上小剣宛葉書に「ハルナ山までのぼる。風色絶佳、温泉もわるくなし」とある。その他、榛名山に同道した人物がいた事実については、『夏の旅』(『読売新聞』大3・7・13)に「一昨年は伊香保から軽井沢へかけて十日足らず旅をして来た(中略)同宿の友人に誘はれて無理に榛名まで行つた」という文面で裏づけられる。小説『九助の旅』(『文章世界』大元・9)にも、『みれん』について問答した記述はないが、『新井』という仮名で登場する文筆家と榛名山まで登つたことが書かれており、上記のことから、『梅鉢草』引用部の事実関係の概略は信じるに足りる。なお、作中の仮名「N氏」が一体誰れであるか目下未詳である。御教示を乞う。

私見によれば、『死者生者』の執筆過程において、曾遊の地伊香保が白鳥の念頭に去来し、当然その結果、五年前の伊香保旅行中『みれん』をめぐるかわした問答の記憶が、意識内の切り離しがたい連鎖となつて再生していたのではないかと考える。先ず上記のことに関連する諸資料を次に掲げる。

○大正五年七月六日付上小剣宛書簡

暑いのに毎日苦勞するため衰弱してゐる。只これがすんだらと、たえず旅行案内など見て旅先を空想して独り慰む。(北陸めぐりと

略決定)。

○「よみうり抄」(「読売新聞」大5・8・4)

正宗白鳥氏は「生者死者」を脱稿して目下長篇を執筆中。

○大正五年八月十二日付上司小剣宛書簡

僕は伊香保村へ転居のつもりでしたが、いい留守番がありさうですからさうしたら家はこのまゝにして数週間行つてくることになるでせう。

○「文芸消息」(「時事新報」大5・8・19)

正宗白鳥氏長篇小説「死者生者」(80枚)を脱稿、中央公論九月号に寄せた。

○大正五年八月二十三日付上司小剣宛葉書(稿者注、発信地「伊香保木暮第一別館」から到着の報知)

○「文芸消息」(「時事新報」大5・9・8)

正宗白鳥氏去る三日上州伊香保から帰京麻布我善坊町一〇に転居した。

大正五年八月は、一篇の作品発表も行われず、九月は「死者生者」一作が公にされただけである。白鳥は前記「事実と想像」において、「死者生者」執筆の苦渋ぶりを「『死者生者』などもつとも骨の折れたもの」と率直にふりかえっていた。はかばかしく進捗しなかつた執筆情況は、前記の七月六日付上司宛書簡に反映している。つまり、白鳥は七・八月の大半を費やし、「死者生者」の完成に没頭していたのである。脱稿日に關しては、八月四日の「よみうり抄」の消息文面は信が置けない。むしろ、紙数を八十枚と報じている八月十九日の「文芸消息」の記事は、「中央公論」の「死者生者」初出文が、四百字詰原稿紙で概算すると七十九枚の分量であり殆んど一致している。伊香保行の日時をも同時に考

慮すると、「文芸消息」の報道の方に信憑性がある。おそらく、伊香保行の計画を伝えた八月十二日から十九日の直前までに脱稿し、「中央公論」へ送稿されたと推定される。この間、七月六日の時点で、「死者生者」を脱稿することが出来次第旅行に出発する予定で、旅行案内を調べながら様々な候補地の中から「北陸めぐりと略決定」しかけていた旅先が、八月十二日の上司宛書簡において、一転伊香保へ変更されている。七月六日の「死者生者」執筆の初期の段階においても伊香保は複数の候補地の一つとして念頭にあつたと思われる。つまり、執筆時、次第に『みれん』を強く想起することになつた結果、『みれん』と切りはなしがたく結びついている曾遊の地伊香保がクローズアップされ、旅先の変更にも立ちいたつたのではないかと考えられる。

### (三)

白鳥が『みれん』に感服した理由は、忍びよる死をみつめ様々な想念に沈むフェリックスの姿が、死生観をめぐって疑惑にのみこまれる白鳥の代弁者の観を呈していることにある。例えば『みれん』第十二章に、「一体この世界には死の宣告を受けたものばかりがうようよしてゐる」、「その癡死といふ事なんぞをまるで考へてはゐない。」というフェリックスのシニカルな感想が見える。これは、「人生五十」(「時事新報」大12・1・11)の書出しである「暗黒の死の洞門へ一歩々々足を進めてゐる我々人間に何の真の幸福があらうぞと私はつねに思つてゐる。屠所の羊に異ならない身でありながら、幸福を夢みるのは不思議なことだと思つてゐる。」という余りに聞きならされた白鳥的ペシミズムの常套文句に酷似している。その他、第三十四章の「あたりまへの人間なら、未知

の事物に対しては、恐怖を感じなくてはならない。旨く行つたところで、その恐怖を隠してゐるに過ぎない。僕は正直な話をするがね、一体これまで歴史に書いてある臨終の心理といふものは皆偽物だ。」という条は、執拗に死の恐怖の超克を形而上的に夢想しては疑惑へ舞いもどつた白鳥の生涯に散在する文章にそのまま重なる。要するに、『みれん』から受けた衝撃の主因は、懷疑家白鳥が絶えず逢着していた疑惑を鮮明にする作品であつたことに求められる。

両作品は、それぞれ胃痛・肺結核という病因において異なるが、主人公がいずれも回復不能の死病を告知されることから始まる小説である。「死者生者」が一年あまりの闘病の後死を迎え、『みれん』が冒頭一年の命であると宣告されている点など共通性が著しい。その最も顕著な点は、清吉・フェリックスが回避しがたい死の影におびえながら生に執着し、同時に身近な生者（妻・恋人）への未練に懊悩し、はては女に接近する男性に対する嫉妬に苦しむ箇所に着しい。

次に、類似性の強い関係箇所を具体的に見ていくが、とりわけ「死生の争ひ」の場面に関しては、『みれん』の表現を直接摂取したのではないかと考えられるほど、一致点が多い。「死者生者」第五章で、夫の看護に倦み疲れたおきくは、ある夜、清吉を厭わしく思い店の外へ逃げ出す。病室から遠ざかったおきくは胸の蟠りが解けたかのようなつかの間の解放感をあじわう。その後、家にもどるや二階に上つたまま返事をしようとしな妻の無情に憤つた清吉が、垂死の体で梯子段を上ってくる条が続く。「暫らくしてふと上り口に亭主の顔が現れた。階子段に足音の前触れもしなくつて出し抜けだつたので、おきくはぎよつとした。見馴れた亭主の顔がまるで亡者のやうだつた。」夫への愛情が冷えきり、嫌惡の思いで眺め始めたおきくが、清吉を対極の世界の「亡者」として

拒絶し、離反を完了した場面である。この条は、『みれん』第四十・四十一章と関連がある。病床をひそかに脱けだし初めて外出したマリイは、今まで失つていた自由を回復し愉悅を感じる。一方、マリイが病床に侍していないことに気づいたフェリックスは、外出の理由を様々に想像し懊悩する。以下はマリイが室内に帰つて来た場面である。

戸が開いた。マリイが這入つて来た。廊下から微な瓦斯燈の光が差し込んで、女の身の周囲を照してゐる。男がくら闇にゐたので、女が知らずに打つつかつて、きやつと云つた。男はいきなりその肩を掴んで、部屋の中へ引き摺り入れた。そして口を開いて何か言はうとしたが、声が出なかつた。

「あなたどうなすつたの。気が変になつて入らつしやるぢやありませんか。」

女は恐怖の余りにかう云つて、男の手を振りほどかうとした。

男は棒立ちに立つてゐる。その様子が見る見る丈が伸びて大きくなるやうに見える。

両作品は、一旦病室の外へ出た女が再度室内にもどってくる行動と、その時周囲は闇に近い暗がりである場面設定において共通する。その他心理面では、病人から遠ざかる物理的距離が心理的な疎隔を醸成し、女の心中に自由への願望が明確化される点、他方、男は女の中に芽ばえ始めた情動を察知し苦悩する点において共通する。このような相反する心理の男女が闇の中に対峙し、女はだしぬけに現われた男を亡者のように感じ心理的離反が具体化される所など類似性が顕著である。その他、夫を見捨てようとする妻につかみかかる清吉を、おきくは「只の亡者」のように無気味に思い突きはなす「死者生者」第五章の凄惨な争いの場面は、『みれん』第四十七章の、闇の中に見開かれている男の目を気味悪

がるマリイに、突如フェリックスがつかみかかり、一方マリイはかつて同意した心中の実行を追ってくる男を、恐怖のあまりふりほどこうとする条との間に影響関係を見ることが出来るであろう。

次に「死生の争ひ」以外で類似する点に一、二言及する。おきくは夫をうとましい「亡者」と決めつけた後は、その早い死を望む思いが脳裏に占めるまでになり、重患の夫の看護は義務的な今生の務めをはたしているだけで、夫の苦痛は何とも感ぜられない傍観者へと変貌を終える。おきくと同様、愛情と献身的な看護を尽くしていたマリイは、次第に臨終の瞬間を思っても別段驚きとならず、男の死は結局当人が楽になることだという偽善の同情によって、心の底にひそんでいる自由への願望を隠蔽している他者に近づいてゆく。以上のように、二人の情合が冷却してゆく心理変容の過程は頗る類似性に富む。

その他、刻々と肉体が衰滅してゆく病人心理の常として、その恐怖感には正常な判断能力を奪うことになり易い。清吉が処方された西洋の薬にかえて、田舎からせんじ薬をとり寄せようとし、おきくに精神の錯迷をたしなめられる条は、フェリックスが死に対する過度の不安のあまり、気分が鬱屈した状態こそ、逆に回復の徴候かもしれないと非論理な空想にすぎる箇所と同工である。

ところで、「死生の争ひと人間の妄執」を描いた『みれん』と比べると、「死者生者」は別の重要な問いかけを内包させていることが明らかだ。清吉が現世的な「御利益」の域から切実に宗教的なものに救いのよりどころをもとめてゆく心理の変容は、『みれん』には皆無である。つまり、「死の恐れ」は避けることのできない「自然の現象」であるから、それを隠蔽した「歴史」に書いてある臨終の心理といふものは皆偽物だ。」と罵倒したフェリックスの結論は、懷疑する人白鳥が常時いだい

ている疑問に合致していた。しかし、人生の一切を虚妄を深める道と見る否定精神と、それを超える宗教的な回生への執拗な夢想という二律背反を精神の基本構造とする白鳥にとって、フェリックスの言は自己の終極の結論であるとすることはできなかったであろう。「死者生者」において、「臨終の心理」は全て虚偽であるという否定を再度組上にのぼし、清吉が「御利益」のレベルから、「心から念仏を唱へてみると、清吉の胸にも少しの間俗縁を離れた安らかな諦めが得られた。」という我執を鎮める宗教性へ高められた後、一転して「女房の五体」を最後の「身の置き場所」にせざるを得ない現世的存在へ回帰し、救われぬ死にいたる展開相の中で、白鳥の問いと得られた認識が定着されているのである。以上のことから、『みれん』は白鳥の問いと認識を促す触媒にこそなったが、「死者生者」との関係で言えば、「死生の争ひと人間の妄執」の場面に影響を及ぼした先行作品であったと限定して考えるべきであろう。

#### (四)

八百屋と床屋が隣接する位置に結合されている設定は、市井に生きる庶民生活の現実感を醸し出す。同時に、隣家の人間が八百屋の内部をうかがう垣間見の構図をも作りあげ、好奇の目でのぞきみる視線に読者の目が同調するしくみをも意図している。それからこの隣接する位置関係には、他に女中おつと小僧邦太の人間像を対比し、社会の底辺に生きる儘ならぬ奉公人の境涯を、人間の運命の寓意として提起するねらいがある。作者が二人を重視しているふしは、「死者生者」全八章において、第三章が虐使される邦太と彼を憐れむおつとのかかわりに割かれた独立した章であることから明らかである。このような作者の関心の所在に

ついで、古井由吉が「感じるものも感じずに居馴れたところに居る下女のおてつや、職人たちに摸られても摸られても痛みが引けばけろりとして脇見をする床屋の小僧の、薄い存在のほうに惹かれてる」(「居馴れたところ」へ『東京物語考』岩波書店、昭59・3・28)という読みは、納得のいく指摘である。

前記村上論文は、二人が手荒く酷使される奉公人という境遇面で共通しながらも、醜い容貌の代償として「素直・実直・忍耐強さ」を与えられたかのような「醜女の運命に甘んじる愚昧な」おてつと、「愚昧という皮をかぶったふてぶてしさ」、兄弟子におもねる「早熟さ」、主人の赤ん坊をなぶることで抑圧された感情のはけ口とする「陰湿さ」を持つ邦太の、対照的な人間性の呈示を指摘する。その上で、両者の人間像について、「チェホフの『ねむい』が『玉突屋』(明治四一年)を経て、ここでつと邦太の二人に分化浸透した形跡を見ることが出来る。」という極めて鋭い着眼を述べている。村上論文は「分化浸透」の具体的な説明を展開していないので、読解の真意が明確に伝わってこない憾みがある。私見で敷衍すると、現状を打破する能動的な行為を封じられた「玉突屋」の吉公が、醜女の運命を諦観してゆくおてつに移入され、「ねむい」の子守り娘グーリカが、虐げられる人間を呪縛している悪意に満ちた運命への反抗の発現として、赤ん坊を扼殺する行為に進み出る積極性が、「嬰兒を玩具みたいに」弄び、ひそかに「愉快」を貪る邦太の代償行為に転換されていると解釈しているのであろう。邦太に関しては、しばしば兄弟子から打撃を受けること、赤ん坊の子守りをさせられる等、グーリカの場合と全く同一である。少なくとも「ねむい」が浸透した形跡は否定できないようである。しかし、かつて英訳の本文で「ねむい」が白鳥に受容された時、主人公の能動性は、「玉突屋」において吉公の

あらがえない運命に転化し、はつきり拒まれていた事実は無視しがたい。つまり、表面的には二人は「実直」対「陰湿」という異質性が大きいようであるが、白鳥は下積み奉公人であることを運命づけられた二人の間に、本質的な差異を認めていないのではないかと思う。「八百屋の御用聞にでも牛肉屋の小僧にでも、自転車に乗れる家に使われた方が、床屋で働いてゐるよりやどれほど仕合せであるか知れないと、彼れの子供心にもそれ一つが儘にならぬ浮世として時々思ひ出されてゐた」という邦太の不満は、一見子供らしいかけりのない願望を持ち、それが未来へ開かれる可能性がなくもない表現のようである。私はむしろ、奉公人邦太が未来にわたって儘ならぬ人生を運命づけられた象徴表現であると考える。邦太は、醜女の運命を主体的に確認し直した結果、「何処へ行つたつて同じ」という諦観に到達するおてつの途上を歩んでいるにすぎない。結局のところ、二人の設定は「儘にならぬ浮世」という作者の認識の枠組みを定着する同族であったのである。このように考えると、おてつが到達する認識の途上を歩んでいる邦太は、「百年も千年も『二つ、』『三つ、』と繰り返しく叫ばねば、打倒れて熟睡は出来ぬ運を背負つてゐる」「玉突屋」の吉公の末裔であつたのである。「死者生者」の序章中に、散歩客の目によって街路に沿った一画にある「玉突場」が紹介された後、再度「玉突屋」から二三軒隔て、理髪店があつて、その直ぐ隣りが八百屋だつた。」と確認されている位置関係の表現、及び邦太の本店時代の同輩の名が「玉突屋」と同じ「吉の奴」として出てくることなども、邦太に関しては「ねむい」よりも「玉突屋」の方が意識されていたことを裏づけるものであろう。



## (五)

「死者生者」に関する重要資料である前記「解説」については、以前の拙論でも言及したことがある。ここでは、『みれん』との関連で、若干の補足をおきたい。「解説」は、エッセー「田園雑記」(「改造」大9・3)の一節を引用しながら、「死者生者」を白鳥の根幹を貫通する「死の恐れ」という人生感想を基調にした一連の系譜作品の一つであると再確認した文章である。幼年期以来、白鳥の精神の痼疾になった死後の世界への拘泥は、キリスト教から遠ざかって以来、一層死生の覚悟が未確定なため、死に対する不安を恒常的なものにせざるを得なかった。そして、「解説」において「死の恐れ」から超脱されないかぎり、「真正の幸福は得られない」という未了の課題を確認し直している。こうした白鳥にとって、一切の死は自己犠牲をいとわぬ崇高なものであれ、天寿をまっとうした幸福な臨終であれ、死後の世界に拘泥するため死を恐れるという一点において、全く差のないものに見えざるを得なかった。上記のような感想に関連し、『みれん』第三十五章の内容に注目してみた。

大方お前なんぞも、アルフレット君と同じやうに、平気で死を向うに見る事が出来ると思つてゐるのだらう。それは死といふものを知らないからだ。犯罪者になつて死刑の宣告を受けて見るが好い。それか、己のやうな体になつて見るが好い。その上でなくては話しは出来ないのだ。盗坊は平気な顔で絞首台へ連れて行かれる。大哲学者は毒薬を呑んでから、旨い文句を考へる。革命を起して、失敗した英雄は、銃の先を胸に突き付けられて笑ふ。さういふのはみんなごまかしだ。己には好く分かつてゐる。平気を装つたり、笑つた

りするのは気取るのだ。なぜといふに死に対しては非常な恐怖を抱いてゐるに相違ないからだ。死の恐怖は死そのものと同じやうに、自然の現象だ。

この引用文は、上記「解説」中に引かれた「田園雑記」の表現、主旨に極めて類似している。芹沢光治良の「ブルジョア」(「改造」昭5・4)を論じた「文芸時評」(「東京朝日新聞」昭5・9・28(10・3)において、「病人とその妻との愛欲の悩みも、いやらしくなく、しかも情味豊かに書かれてゐる。シュニツラの『死』(鵝外訳の未練)と同工異曲といつていい、感じました。」と述べており、昭和に入つても『みれん』の記憶は鮮明に生きのびていたことを考慮に入れると、『みれん』の内容が、大正九年の「田園雑記」を経て戦後の「解説」にまで、懷疑とその超克との間で振幅を続けた内面の相剋の歴史を通し、疑惑へ傾斜する感慨に付随して想起され続けていたと考えられよう。

稿をおえるにあたり、上記「解説」中に「死者生者」を「都会小説」であると自己規定した真意にも言及しておきたい。「解説」には、その他自作に不満と自嘲をくりかえしてやまなかつた白鳥らしからぬ「本格的な小説」というほこりかな宣言も述べられている。この自讃と関連して、友人岩野泡鳴が小説家の本領は「都会小説」を書くことにあると白鳥に忠告していた思い出を引き、ながらく課題になっていた宿願を「死者生者」によって成就することが出来たと述べている。「死者生者」と『みれん』との影響関係から考えると、チェーホフの「ねむい」に強く示唆されながら、完全に自家薬籠中のものにし、純平たる独自性を主張する創造であると宣言した(「旧作回顧」(岩波文庫「何処へ・泥人形他二篇」昭26・3・20)「玉突屋」の場合と同様に、「死生の争ひと人間の妄執」をめぐる同工の作品『みれん』を意識しながら、甘美な都

会情緒のシュニツラーの世界を、白鳥の死生観・人間観によって受けとめ、「儘にならぬ浮世」をかこちながら間断なく流動してゆく都市居住者の生活表現に完全に転化させきった創作であるというひそかな自恃の思いが含まれていたと考えるてもよからう。

## 注

1 通院中、唱名を唱える胃癌患者から受けた陰惨な印象は、「病中日記」(新公論 大4・6)にも見える。「かう云つてゐると、いくらか気が紛れる」と言つて清吉が念仏を唱える第五章の場面については、小説「春が来たのに」(文章世界 大4・5)の「土のやうな面色をしたある老人は蠣のやうな目を据ゑて、口の中で念仏めいたことを咳いてゐたが、『何か云つてゐるといくらか気が紛れる。』と附添ひの女に云つてゐた。」という一節に極めて類似性の強い表現が見いだせる。

2 英訳の「イワン・イリイチの死」を読んだ時期が曖昧であるが、「自然主義盛衰史」(風雪 昭23・3-12)の「彼の特異の短篇『クロイツエルソナタ』や『イワン・イリキツチの死』は、自然主義作品の典型の如く珍重されてゐた。」という回想の文面から推測すると、自然主義文学が盛時を迎える明治四十年代に披見したと考えられよう。

3 「イワン・イリイチ」に言及した資料を掲げる。①前掲「『死』を描いた文学」②「地獄極楽」(東京朝日新聞 昭13・6・5-7)③「明治時代の外国文学印象記」(学術の日本 昭17・4・20)④「文芸時評」(新生 昭21・5)⑤「文学に於ける『解決』是非」(朝日評論 昭21・10)⑥前掲「自然主義盛衰史」⑦「不徹底なる生涯」(文潮 昭23・5)⑧「読書雑記」(中央公論 昭26・1-12)⑨「現代つれづれ草」(文学界 昭32・4-12)

⑩「すべて物憂し」(新潮 昭32・6) ⑪「読書の楽しみ」(婦人之友 昭33・1)